

安秉禧先生を悼む

菅野裕臣

元神田外語大学

わたくしのウズベキスタン滞在中 2006年10月24日に突然神田外大の濱之上幸氏から韓国の安秉禧先生がお亡くなりになったという知らせを受け取った。26日に葬式があり、神田外大の権容璟先生は25日の飛行機でソウルに駆けつけるとのこと、濱之上幸氏は欠かせない大学の用事で行けない。わたくしもまずは無理である。権先生によろしく伝達を頼むメールを濱之上幸氏に送り、併せてソウルの成百仁氏（安秉禧先生の友人、満洲語学）にあてメールを送り、ご家族への弔意を伝達するよう依頼した。

思えば安秉禧先生との付き合いは長かった。成百仁氏を通じて知り合ったが、故志部昭平氏（千葉大教授、中期朝鮮語専攻）ともども親しくお付き合いをさせていただいた。わたくしが先生にお会いした最後は3年前の春だったろうか、先生はものすごく顔色が悪かった。一昨年にはかなり容態が悪いらしいと聞いていた。不吉なことは予想はしていたが、とうとうそうなったかという感じである。

先生は言語学者にしては珍しく政治感覚もすぐれており、韓国の国立国語研究院の基礎は先生が築かれたとあってよい。わたくしは東京外国語大学、神田外語大学在職中先生には第1に韓国人教授の日本派遣について全面的に、第2に東京外大とソウル大学との学生交換協定の締結について本当にお世話になった。

わたくしと故志部昭平氏に関しては中期朝鮮語の原資料を見せてもらうのに図書館やら蔵書家を紹介してもらったりし、韓国に行くと必ず安秉禧先生に会った。わたくしがちょうど東洋文庫にいた頃安秉禧先生も東洋文庫に来ておられ、故志部昭平氏とともによく3人で会ったものだった。あの頃金大中事件の直後とて日韓関係が最悪の時期で、安秉禧先生はいろいろと不便をされたことを思い出すが、先生は、他の韓国人とは違って、日本人の前で不満をやたりに表明したりはされなかった。

安秉禧先生こそは朝鮮語学における書誌学の基礎を固められた唯一の確かな韓国人研究者として河野六郎先生も高く評価しておられた。蔵書家の都合で公表出来ない書籍の情報をよく持っておられ、例えば公表は出来ないが、『龍飛御天歌』（15世紀）の初刊本は慶尚道のだれかが持っていると言っておられた。わたくしが朝鮮の陀羅尼に関心があることを知ると、まだ公表出来ない陀羅尼資料のコピーを送ってくれたりもした。よく書誌学のための書誌をやる人がいる。故田川孝三先生（朝鮮史）に素直に弟子入りしなかった某氏は言語学でないこ

とは確かだが、さりとして歴史学をやらない以上書誌学は出来るものではないと田川孝三先生は評しておられた。この点安秉禧先生は田川孝三先生からも学び、田川孝三先生ともよい関係を持っておられたが、言語学者としての分をよく守り、あくまでも言語学のための書誌を行った。ここには小倉進平、『朝鮮語学史』をよく継承し、修正し、完成させようとする態度がうかがえた（ついでながら朝鮮語学は小倉進平の『語学史』を持ったが、日本のモンゴル語学も満洲語学も小倉進平がいなかったとは故志部昭平君の名言である。ここ『中央アジア語学史』の建設はまず不可能だろうと思っているが、それがなされないうちはこの地域の歴史学研究も当然限界であろうとわたくしは思っている）。

だいたい韓国人言語学者の書いた書誌に関する論文はどれもが怪しく、わたくしはよく安秉禧先生に尋ねたものだった。安秉禧先生はソウル大学の学生の時朝鮮戦争に遭い、釜山避難中に河野六郎先生の卒業論文（これはいまなら博士論文にも当たる）を古本屋で見つけ、購入して持っておられたが、日本に來られた折河野先生に返され、これが『河野六郎著作集』に収められた。

京城帝国大学出身の韓国人教授（第1世代）の次の世代（第2世代）に属する安秉禧先生は、書誌と勿論関係があるが、中期朝鮮語文法については韓国で唯一確かなものを持っておられたというのがわたくしの見方である。日本ではこの分野で故志部昭平氏の後を継ぐ者がおらず、韓国でも安秉禧先生の死をもって一つの時代が終わったと言ってよい。

安秉禧先生についての思い出は尽きないが、シナの延辺朝鮮族自治州の学者らと韓国の学者との交流の先鞭をシナ側の依頼によりわれわれがつけたが（1980年代）、その際にも安秉禧先生に負うところが大きかった。ここで公表出来ないほかのいくつかの事どもも安秉禧先生に負っている。

蔵書はすべて故郷晋州の慶尚大学に寄贈されたと聞いている。

慶尚南道晋陽郡の両班出身。朝鮮の真の両班が一人また逝く。黙禱。